

日本総合愛育研究所

『1988／89 日本子ども資料年鑑』

(中央出版)

藤井チズ子 著

『すてきなおかあさん学』

(学陽書房)

花形 恵子 著

『ことば美人は暮らし上手』

(六興出版)

村石 京

「1988／89 日本子ども資料年鑑」

子どもとかわる仕事をしている者にとって、大切なのは子どもを深く見る、そして広く正しく見ることです。そのためには個人の主観やものの考え方だけに留まらないで、子どもに関することを多面的に知ることも必要です。

子どもに関することといえば、その身体的発達面、あるいは精神的発達面、そして子どもを取りまく環境等多くのことがあげられます。社会環境、家庭環境、教育環境、あるいは医療や福祉の面などもあります。そしてこれらにたずさわる仕事をしたり、研究したり、学んだりしている者達は、しっかりと資料が必要なことがあります。これは勿論現場の教師にとっても同じであって、今日の前にいる子どもを考えるときも、現代の子どもの生活環境や総合的発達に目を向け、偏りのない広い視点から子どものことを考えていくことが大切であることはいうまでもありません。

このように考えると、この度、社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本総合愛育研究所から発刊された「1988 / 89 日本子ども資料年鑑」は私どもにも多くのことを教えてくれるよいマニュアルといえます。

例えば、家族構成と家族形態の中の「世帯の種類と規模」の欄一つを見ても、昭和35年から昭和60年までの推移の中で数字の中からは種々なことを読みとることが出来ます。また、家族の生活と意識における「家族と子ども」の中の母親の年令別にみた子どもに対する価値観や、子どものしつけ方の責任についての表等を見ていると、年代による子どもに対する母親の意識などが読みとれます。

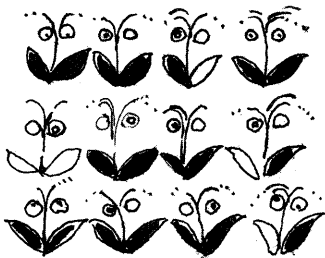
資料ですから全体に図表が多いのですが、数字や表はどれも苦手などといわずに見ていると、実に種々な内容が載っているのです、子どもにかかわる社会問題、家庭問題、経済問題など多くのことがわかります。子どもに関するあらゆる分野の資料が内容豊富にまとめられてあるので、子どもの関係の仕事や

研究をしている者にとっては、貴重な資料年鑑であるといえましょう。

「すてきなおかあさん学」

「ことは美人は暮らし上手」

どちらも新しく出版された本です。ここに二冊並べてとりあげたのは、私が個人的に知っている方というだけでなく、どちらも母親としての体験から学



んだことがこの本の中に盛り込まれていて、かつ、現在の夫々の仕事の面に活かされていると感じたからです。

先ず著者について簡単に御紹介してみましよう。

藤井チズ子さんはお茶の水女子大学児童学科の卒業生で、NHKの「おかあさんの勉強室」や「市民大学」といった教育番組を長く担当されて、現在はNHK教育番組センター・生涯教育部チーフディレクターとして活躍している方です。花形恵子さんは劇団ぶどうの会で、山本安英氏等に師事して「語り」についての基礎を学び、現在はラジオやテレビに出演するかたわら、夫君篠原大作氏とともに詩を演ずる試み「言葉の散歩道の会」の公演を続け、「詩とあそびましよう」「おはなしあそび」などを行って、その反響も大きいと聞いています。そして二人に共通していることは、仕事を長年続けてこられた女性ということだけでなく、主婦として母親として家庭を大切に、子どもを大事に育てながら、子ども

もからもいろいろなことを学び、子どもと共に自分自身が豊かになっている姿があることです。

藤井さんは、NHKの取材や多くの機会の中から、母親の役割、母親の姿、ものの考え方、家庭のあり方の大切さ、子どもへの影響力の大きさを、たくさんの例と彼女自身の考え方を合わせて述べていきます。文章の中に体験を通して学んだ多くの事柄があり、読む者に改めて母親の与える子どもへの大きい力というものについて考えさせられます。「子どもが順調に育つには暖かい親子関係が基本になる」と藤井さんは述べています。そして自分の子育ての経験が、番組の企画や取材にもつながり、その番組を通して知り得た子どもの発達や教育についてのこととか、多くの人々との出会いや体験が綴られています。番組の中には出しつくせなかったものや、映像には残しえなかったものが、本の中に書き現してあります。

花形さんは自分の子育ての体験を通して、絵本や

ことばによる親子のスキミングの中で、大切な多くのものが育つことを書いています。私どもはともするとせわしい毎日の生活に追われ、一日一日をクリアするのが精一ぱいという日常を過ごしていて、大事なことや、そのときでなければ再びこないものを片すみに押しやったり、なおざりにしたりしてしまいがちです。どんなに忙しかったとしても多忙と

いう口実を被ってはいはならないし、細やかな心を失ってはならないと思います。小さなことに気づく豊かな感性をもった人間でありたい、そして美しい言葉で語りあえる人間でありたいと、優しい詩を読み、「詩」を大切にすることを心につれて改めて思うのでした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

大江健三郎 著

『人生の親戚』

(新潮社)

中村 弓子